

苗場山麓 ジオパーク

Vol.
38

振興協議会だより

〔発行日〕 令和元年8月27日
〔発行〕 苗場山麓ジオパーク推進室
〔お問い合わせ〕 025-765-1600



“フジロック”で伝えたジオパークの魅力



日本最大の音楽フェスである「フジロックフェスティバル2019」のオレンジカフェに“苗場山麓ジオパーク”ブースを出展しました。苗場スキー場で展開されているフェスであることから「苗場」つながりもあり、快く出展を了解いただきました。その背景には、3日間で約13万人の観衆が押し寄せるビックフェスに年々ファミリー層が増加する傾向が続き、その対応が検討されてきました。そのような状況のもと、ジオ+エコ+カルチャーの3要素で構成されるジオパークの雄大な自然環境とそこに5,500年前に展開した縄文火焰土器文化を全面に押し出したブースディスプレイは、人目に付きやすく、多くの観衆の足を止めました。

五感を通してジオパークを知らしめていることから、縄文体験として「勾玉作り」「火おこし体験」「黒曜石のアクセサリ作り」「火焰土器のペーパークラフト」「枝木の動物作り」を行いました。3日間で約450人のお客様に会い、心と会話で接する体験学習は、共に多くのことを学ぶ機会を与えてくれました。



大人の真剣な眼差し、子どもの歓声と笑顔、スタッフの輝く汗、どれもこれも“ステキ”な出会いでした。最後に出来あがった世界に一つしかない宝ものを大切な思い出として持ち帰って頂きました。未来をつくる子ども達に、笑顔で「また、苗場で会おうね～」の挨拶が飛び交っていたのがとても印象的でした。

また、オレンジカフェの広場中心に「縄文」つながりで、竪穴住居を題材にした現代アートが出現して聴衆を魅了し、フォトジェニックとして多くの撮影者が集まっていました。その脇で行った「火おこし体験」にもたくさんの観衆が集まり、多くの方々が火の精霊を呼び起こし、歓声と感動の渦に巻かれていました。

フジロックは「雨のフェス」との代名詞があるように、天候はいささか良くありませんでしたが、海外を含め多くの方々に苗場山麓ジオパークの存在とその構成要素に触れて頂く機会となりました。この企画を一過性のものとせず、持続的に意味を持った世界発信の場として機能させるよう、これからも事務局では研鑽と連携を進めたいと考えています。





立教大学観光学部の学生さん方からジオツアーの感想をいただきました！

普段は都心で生活している私たち学生にとって、7月13、14日のジオパークツアーへの参加は大変貴重な経験となりました。特にツアーの最初に「なじもん」で津南町のジオラマを見てから川の展望台など各所を巡るという流れは、これから始まるツアーへの期待値が高まるとともに、実際にその風景を目にしたときに言い表せないほどの感動を与えてくれました。龍ヶ窪は想像以上の美しさであり、河岸段丘や石落しは私たちに壮大な自然を感じさせてくれました。そのなかでもこのツアーの良いところは、きちんと認定を受けたガイドの方が引率してくれたことでした。ジオパークについての深い知識を持っており、なおかつ親しみやすいガイドの方の説明を受けながらツアーに参加することで、ジオパークに対する理解をより深めることができました。スタディツアーとして子どもが訪れることの多いというお話でしたが、いただいたパンフレットは確かに子どもをターゲットに作られている反面、私たち大学生でも思わず感心してしまう勉強になる内容も含まれていて、ガイドの方のお話を聞きながらとても参考になりました。このように、ジオツアーならではの観光客とガイドの方の距離の近さは、今後観光客を増やす要素になるのではないかと考えます。ガイドの方とのコミュニケーションを通じて親しい関係が築けたなら、ジオパークを目的に津南町を訪れる観光客だけでなく、ガイドの方に再び会うことを目的としてやってくる観光客を獲得できるのではないのでしょうか。



しかしその一方で、津南町が観光地として急成長を遂げることも、現在の自然環境を保護することを優先すべきではとの声も上がりました。たくさんの方が訪れることで生まれる弊害は現在「観光公害」や「オーバーツーリズム」として知られ、多く考えられます。津南町のすばらしい自然を維持するためにも、むやみに観光客を誘致するのではなく、国内外のエコツーリズムを好む観光客や、地域との密接な交流を好む人びとをターゲットに、「津南」という町の価値を向上させていくことが望ましいのではないのでしょうか。インバウンドに対しては、キャッシュレス対応や多言語対応が必要であると思われるので、まずは地域住民の方々の理解を得るなど、海外からの観光客に対する抵抗を緩和していくことが必要になってくると思いました。



最後に、私たちはこの2日間を通して、ジオパークに関することや津南町のことをたくさん学ばせていただきました。今まであまり知らなかった分野についての知識も得られて、とても勉強になりました。津南町で出会った壮大な自然とあたたかい人びとは非常に大きな魅力であると思います。いつかまた、みんなで訪れたいです。



「ツール・ド・苗場山 栄村100kmサイクリング」が開催されました！

8月4日に夏のサイクリングイベント「ツール・ド・苗場山 栄村100kmサイクリング」を栄村・津南町の方や地元企業にご協力いただき開催しました。今年より現大会名に改称し、13回目の開催で、北は東北、南は沖縄と日本各地より約300名の選手が参加されました。当大会の100kmコースはさかえ倶楽部スキー場をスタート・ゴールに、栄村と津南町の一部を通る累計標高2,500mに及ぶ難コースですが、秋山郷とその周辺地域の雄大な自然を楽しめます。応援する地元の人との温かな触れ合いやエイドステーションでは地域の飲食物を提供するなど地域に密着したイベントとなっており、毎年多くのリピーターが参加しています。

今年は栄村産の行者ニンニク入り餃子、塩煮芋、栄村産の食材を使った夏野菜カレーなどを提供しました。

タイムを競うレース形式ではないので若者から60、70代の方まで幅広い世代が参加しています。栄村の地域と人々に魅力を感じ毎年参加しているリピーターの方がいます。少しでも多くの選手にお越しいただけるようPRしていきたいと思います。



認定ジオガイド
が伝える

ここが好きだよジオパーク

認定ジオガイドがおすすめの場所、
もの、ことなどを紹介していきます。

尾池三佐子さん



絵と文学で楽しむジオパーク巡り（ガイド No. 9 尾池三佐子）



切明の川原

ジオガイド研修を受けるようになって、早6年がたちました。研修で津南町、栄村のジオサイトをめぐる度に、苗場山麓ジオパークは宝ものがいっぱい、自然の宝庫とを感じるばかりです。特に津南町と栄村をまたぐ、秋山郷が大好きな場所です。

今から約190年前（1828年）、7日間かけて自分の足で歩いた記録を『秋山記行』という本に著し、「秋山郷」を世の中に紹介した人が鈴木牧之さん（以下敬称略）。文人であり、画家でもあります。

鈴木牧之は秋山の自然はもちろん、当時の秋山の人々の生活に感銘を受けたのでしょう。歩いた記録の中にたくさんの絵も描いています。その絵一枚一枚が現在の風景と変わっている所、まるで変わっていない所を見比べるのも楽しいものです。

その絵の中で驚いたのは、現在の切明の様子です。当時は「湯本」と呼ばれていました。当時の「湯本」は中津川左岸にあり、宿が2軒あったのが鈴木牧之の絵からも分かります。その19年後に善光寺地震が起き、鳥甲山の斜面が崩落、中津川がせき止められて湖となり、湯本の宿は水没したと言われています。その翌年、佐久間象山がこの土砂を切り開く工事をして、中津川の流れを復興したことで「切明」の名がついたと言われています。

現在、川原を掘ると温泉の湯が出てきて、夏は観光客でにぎわっていることでしょう。

もう一つは『秋山記行』で最後に寄った、猿飛橋です。現在は立派な橋となっていますが、その橋の真下に大きな岩が2個、中津川をはさんであります。

当時はその岩に丸太がかかって、人々が行き交っていたのですが、鈴木牧之は、とてもスリルのある橋を渡ったと著しています。その橋のたもとから川原に下りると、対岸に柱状節理が千体仏像のように並び、それは見事です。そして川原から橋を見上げると、大きな岩を鈴木牧之も渡ったのかと感慨深くなります。

ぜひ機会がありましたら、鈴木牧之の絵を見ながら、秋山郷を歩いてみませんか？



現在の猿飛橋と逆巻の川原の様子



車椅子利用者を想定したガイド研修を行いました！

ジオ・エコ及びカルチャーサイトなどの地域資源は、健常者には大きな支障がなく鑑賞できます。しかし、高齢者や障害者の方などは、希望しても行けないところが多いことも事実です。今年度のガイド研修では、万人に対応するガイドの実践(ユニバーサルデザイン)を柱に研修することになりました。皮切りに、6月29日に好天の下、車椅子のお客様をご案内することを想定して、見玉公園を巡りながら石落としを見学するツアーを実施しました。その中で、バスから降りる時に最低でも3人は人手が必要なことや、砂利場の駐車場だと車椅子が動かせないこと、2cm程度のわずかな木の根や石があると前進しにくく、車椅子に段差は禁物であるということを体感しました。また、車椅子に乗るとお客様の目線は低くなるため、お客様の視点に配慮する必要があることなど、多くの課題を見つける事ができました。



突撃しよう!となりのジオ便り～白山手取川ジオパークからこんにちは～



大汝峰上空から見た白山 写真提供：木村芳文

白山手取川ジオパークは、石川県白山市全域をエリアとする日本ジオパークです。白山手取川ジオパークでは、現在、白山から手取川、日本海に至る中で繰り返される水循環とそれに伴って白山から日本海へ大量の土砂が流される様子を「水の旅・石の旅」と呼んでいます。白山手取川ジオパークでは、この「水の旅・石の旅」をキーワードとして火山や化石、峡谷や扇状地など大地の成り立ちを、自然と人との関わりの中で楽しみながら学ぶことができます。

この「水の旅・石の旅」を語る上で欠かせないのが、ジオパークの名前にも冠されている「白山」です。御前峰、大汝峰、剣ヶ峰を白山三峰といい、一般的にこの三峰周辺を白山と呼んでいます。白山は活火山で、三峰とも白山火山の最も新しい火山活動である新白山火山の噴出物により構成され、3～4万年前以降現在に至るまでの噴出物から成り立っています。白山は、砂岩泥岩の互層を基本とする恐竜時代の地層の上に火山噴火による噴出物が載るという大地の成り立ちがあります。更に白山周辺の大量の積雪が解けることによって豊富な水を生み、これらのことが非常に崩れやすい大地を形成しています。こうした大地の成り立ちが、地質地形の多様性を生み出し、豊富な種類の高山植物をはじめとした動植物の豊かさにもつながっています。

また、白山は平野部から望む優美な山容や、間近で見られる山頂部の荒々しい火山の風景から、古来より信仰の対象となってきた山でもあり、加賀・越前・美濃にはそれぞれ禅定道が作られてきました。3つの禅定道にはそれぞれ麓にゆかりの神社があり、白山信仰の歴史を今に伝えています。このように白山は、ジオ・エコ・ひとのつながりがとても感じられる場所です。

そのほか、白山から流れる手取川の中流域には「手取峡谷」と呼ばれる高さ20～30mの絶壁が8kmに渡って続いており、落差32mの綿ヶ滝などの絶景を楽しむことができます。また、下流域には上流から運び出された大量の砂礫が平野部にたまることにより形成された広大な「手取川扇状地」が広がり、獅子吼高原からはその絶景を楽しむことができます。

白山手取川ジオパークでは、このような「水の旅・石の旅」の見どころをご案内する公認観光ガイドが活動しておりますので皆様の観光のサポート役としてご利用いただけます。お時間がございましたら、白山手取川ジオパークへどうぞお立ち寄りください。



綿ヶ滝